

4 右室圧負荷所見が正常化した慢性血栓塞栓性肺高血圧症の一例

○青柳 真佳、丸山 千恵子、小片 早千子、山崎 明、松永 克美
長谷川 恵美、藤原 ゆう子、丸山 大節、神田 有里、真嶋 ちはる
長岡赤十字病院 検査技術課

【はじめに】慢性血栓塞栓性肺高血圧症とは、器質化した血栓により肺動脈が慢性的に閉塞を起こし肺高血圧を合併したものである。主な症状としては、労作時の息切れや易疲労感があり、安静時の自覚症状は特になことが多い。

【症例】46歳女性【既往歴】特になし

【現病歴】2013年5月、軽労作での強い息切れ・咳嗽により近医を受診。トレッドミル検査で運動直後より急激な心拍数上昇を認めたため、直ちに中止し心エコーを行ったところ、三尖弁収縮期圧較差が82mmHgと肺高血圧症を指摘された。後日、胸部造影CTを行ったところ、両側肺下葉の肺動脈分岐の造影途絶を認めたため、肺血栓塞栓症を伴う肺高血圧症と診断された。近医でワーファリン治療を行ったが、あまり効果が見られず、精査目的で当院紹介となった。

【心電図】V1～V3で陰性T波

【心エコー】左心機能は良好だが、三尖弁収縮期圧較差が80mmHg、最大血流速度が4.5m/秒と著明に上昇していた。この値から推定肺動脈圧を算出すると86mmHgとなり重症肺高血圧といえる。また、右心系が拡大しており、左室短軸断面像では心室中隔が扁平化していた。

【下肢静脈エコー】

血栓(一)

【経過】治療としては、はじめにウロキナーゼとヘパリンの持続投与を2週間行い、心エコーでの推定肺動脈圧は72mmHgまで低下した。同時期に行った右心カテーテル検査での収縮期肺動脈圧は68mmHgであ

り、心エコーの結果とほぼ一致していた。また、酸素投与で肺動脈圧の低下を認め、酸素の効果があるということがわかった。その後、ヴォリブリス・アドシルカ内服と酸素療法導入により、心エコーでの推定肺動脈圧は54mmHgにまで低下した。右心系の負荷所見も改善し、退院となり、内服と住宅酸素療法で加療することとなった。半年後の心エコーでの推定肺動脈圧は34mmHgと著明に改善し、右心系の圧負荷所見も消失していた。右心カテーテル検査での収縮期肺動脈圧は37mmHgであり心エコーの結果ともほぼ一致していた。また、酸素負荷では有意な差はなく、酸素療法も中止できるまでに改善した。

【まとめ】心エコーで計測した三尖弁逆流の最大血流速度から算出した推定肺動脈圧と、右心カテーテル検査で計測した収縮期肺動脈圧の結果は、ほぼ一致していた。このことから、右心負荷所見が正常化する過程を観察するうえで、心エコーが有用であったといえる。

連絡先：0258-28-3600(内線 2135)